



なか た よし ゆき
中田賀之

文化表現系教育コース准教授
[言語系教育分野(英語)]

このページでは日本学術振興会の科学研究費補助金(平成23年度から科学研究費助成事業に改称)を受けた研究を紹介し、科学研究費補助金とは、すべての分野の「学術研究」を格段に発展させることを目的に、独創的・先駆的な研究に対して助成を行うものです。基盤研究、挑戦的萌芽研究、若手研究などに分かれており、基盤研究は1人または複数の研究者が共同で行う研究が対象。研究期間は3～5年です。

| | |
|---------|---|
| 統合的診断尺度 | 総体的に教室内英語力がどのレベルかを判断するための評価を主な目的とした尺度 |
| 内省的分析尺度 | 授業実施者が主体となり、それぞれの項目がどの程度できているかを明らかにするためのチェックリスト |
| 機能別尺度 | 焦点を当てたい機能に特化してどの程度できているかを明らかにするためのチェックリスト |
| タスク別尺度 | 英語教員が授業中に英語を用いて行う(行うことが期待される)一連の活動を記述の対象としている尺度 |

高等学校新学習指導要領で行うことを基本とする」と明記されて以来、英語教員の間では「英語で授業すること

日本人英語教員の英語力向上に役立つ
「教室内英語力」の評価尺度の開発
(平成22～24年度科学研究費補助金・基盤研究に採択)

は大切だ」「英語だけで授業しても生徒はついてくることはできない」など、さまざまな議論が巻き起こっています。英語力に自信がなく、英語で授業することに不安を感じている方もおられるでしょう。

私自身、文部科学省のスーパードクター・ハイスクールの企画評価会議協力者としてさまざまな高校現場を訪ねた経験から、英語教員の不安を和らげつつ、彼らに求められる力を着実に付けることが必要であると思っていました。しかし、そのためには教員が内省の道具として使用できる教室内英語力に特化した評価尺度が必要で、英語教員が、求められる英語力と自らの英語力の実態を把握して、必要なレベルに到達するまでの過程について考えさせてくれるからです。

この目的を達成するべく、他大学の先生方(池野氏、長沼氏、木村氏)や教育現場の先生方(河野氏、ゼミ修了生

の小笠原さん、篠原さん、棟安さん、徳山さん)、香港大学のアンドリュー氏らの協力を得て、4種類の尺度作成に取り組んでいます【表・図】。

統合的診断尺度を基本としながら、それを補足する意味で内省的分析尺度があり、授業を通して特定の機能に特化した内省には機能別尺度、特定の活動に特化した場合はタスク別尺度など、それぞれ必要に応じた使用を推奨しています。英語を一方的に話すのではなく、正確な文法・単語・発音を担保しつつも、生徒の理解や状況に応じた質問や発話がどの程度できるかを評価できるよう4段階の記述も設定しています。

学術的な価値を高めた現場の教員に活用してもらえよう、さらに尺度の精緻化と試験的使用を繰り返しながら望ましいものにしていきたいと思っています。中・小学校の英語教員の教室内英語の向上にも役立てば幸いです。

教室内英語尺度関係図

